

不登校生徒の過去から現在にわたる家族イメージ

—動的家族画 (KFD) と家族イメージ法 (FIT) を通して—

13012PCM 間瀬 歩美

問題と目的

1. 不登校と家族

文部科学省の調査 (平成 25 年) によると、不登校のきっかけと考えられる状況として、中学校では家族に係る状況が第 5 位に入り、高等学校では、家族に係る状況は第 9 位に入ってくる。以上の数値から、家族に係るものは決して多いとはいえない。しかし、効果的な学校の措置としては、学校内の指導や改善よりも、家庭への働きかけであるという結果が出ている。つまり、不登校の実態を考えると、その基礎となる家庭生活は全ての不登校の状況に何かしら絡んでくるのではないかと考える。また鈴木

(1988) によれば、不登校とは家族にマイナスの影響をもたらしているというよりも、硬直化した家族の相互作用やコミュニケーションのパターンを変化させるなどプラスの面もあるように思うと述べている。つまり、不登校とは家族構造を見直すきっかけとなり得るのである。

2. 家族イメージ

思春期までの子どもの発達課題として、安定した自我同一性を形成するためには、同一化のモデルとしての父親イメージ、母親イメージの内面化が重要となってくる。しかし、特に、思春期は内面を大人に知られたくない気持ちが強く働くため、家族関係のアセスメントをする際には「動的家族画 (Kinetic Family Drawings : 以下 KFD)」や「家族イメージ法 (Family Image Test : 以下 FIT)」など、非言語的なアセスメント法の活用が重要になってくるのではないかと考える。

3. 本研究の目的

今回の研究において、不登校生徒は、不登校という問題を乗り越えるために、家庭や学校という居場所の中で、自分のもつ家族イメージをどのように捉え、変化の経過をたどっていくの

だろうか。不登校という問題は家族構造を見直すきっかけとなり得ることから、子どもが抱く家族イメージを検討することで、それを家族の再構築の支援へとつなげることを目的とする。

研究 1

1. 目的

数量的に分析しやすいとされる FIT について、3 時点における全体的な変化の傾向について「世代間境界」、「連合」、「パワー」の観点から検討することを目的とする。

2. 方法

調査協力者：フリースクール A 学園の中学 2 年生から高校 3 年生までの生徒 12 名 (男子 10 名、女子 2 名、平均年齢=16.42, $SD=1.44$) の協力を得た (表 1)。

調査協力者	年齢	学年	性別	調査時の家族構成
1	14	中2	男	父方祖父母、父、母、妹
2	15	中3	女	母方曾祖父、母方祖父母、父、母、弟、弟
3	15	中3	男	父 (単身赴任中)、母、妹
4	15	高1	男	父方祖父母、父、母、妹
5	16	高1	男	父、母
6	16	高2	女	母方祖父母、父 (別居中)、母
7	17	高2	男	父、母、姉
8	17	高2	男	父、母、弟
9	18	高3	男	父方祖父母、父 (養父)、母 (養母)
10	18	高3	男	父、母、兄
11	18	高3	男	父方祖父母、叔父 (父の弟)、叔母 (父の妹)、父、母、姉、妹
12	18	高3	男	母方祖父母、父、母、弟、弟

調査内容：FIT3 時点 (①現在、②学校へ行けなかった頃、③学校へ行けていた頃)

調査手続き：2014 年 9 月から 10 月にかけて、口頭で説明をし、了解が得られた者のみ、個別に実施した。

3. 結果と考察

父子連合にのみ 3 時点での経時変化がみられたが、その父子連合についても多重比較の結果はどの時期との間にも有意差はみられないという結果となった。

このような結果となった背景として、調査協力者が個人差の大きい思春期・青年期の生徒たちであったということが考えられる。また、小学校から長期化している不登校生徒が抱く家族

イメージと、そうではない不登校生徒が抱く家族イメージでは、同じ学校へ行けていた頃と時期を設定しても、その当時の家族イメージの思い浮かべやすさ、捉えやすさは異なってくるものと考えられる。

そして、父子連合のみ有意差がみられた点については、不登校によって父親役割を意識せざるを得ない状況となったのではないかと推測される。不登校という問題が父親の関心を家庭に向けさせ、子どもと向き合わざるを得ない状況を作り出したのではないかと考えられる。

研究 2

1. 目的

研究 1 において FIT の 3 時点の経時変化について統計的な分析を行ったがほぼ有意差はみられなかった。そこで個別での事例検討として、生徒のもつ家族イメージとそこからくみとれる今後の支援という観点から検討していく。

2. 方法

調査協力者：研究 1 の調査協力者のうち、学園での適応状況が分かるもの、中学 2 年生の男子 1 名、高校 2 年生の男子 1 名、高校 3 年生の男子 3 名の計 5 事例を検討した。

調査内容：FIT3 時点、KFD、A 学園が所有する生徒の成育歴、A 学園での生活概要

3. 結果

(1) 事例 1 : C (高 2 男子)

家族構成：父、母、姉

FIT, KFD から、家族は 3 時点とも一貫して等距離に配置され、硬直化した家族イメージが読みとれた。また家族バラバラの場面が描かれ、相互交流の乏しさが考えられた。今後、肯定的な両親イメージを育み、家族としてのまとまったイメージが抱けるようになっていく必要があると考えられる。

(2) 事例 2 : F (高 3 男子)

家族構成：父、母、姉、妹、父方祖父母、叔父、叔母

FIT, KFD から、世代間境界があいまいで非常に複雑で入り組んだ家族構造が読みとれ、父親との関係の希薄さが考えられた。F は不登校を通じて、家族構造を整理しなおそうとしたよ

うであり、そのためにはまず夫婦連合の見直しが求められるのではないかと考えられた。

(3) 事例 3 : I (高 3 男子)

家族構成：父、母、父方祖父母

FIT, KFD から、父親に対する葛藤的な思い、両親イメージの希薄さが読みとれた。今後、父子が向き合うことで父親に対する肯定的なイメージを育むことが必要ではないかと考えられた。

(4) 事例 4 : K (高 3 男子)

家族構成：父、母、弟、弟、母方祖父母

FIT, KFD からは、自分と祖父母、母と弟二人というまとまったイメージが読みとられ、同胞葛藤や、両親に対する否定的なイメージが読みとられた。両親も K に対して否定的なイメージを抱いており、家族成員間でお互いに肯定的なイメージを育む必要性が考えられた。

(5) 事例 5 : N (中 2 男子)

家族構成：父、母、姉

FIT, KFD からは家族はそれぞれ自分の関心ごとに目を向けており、相互交流のなさが読みとれた。N にとって安全基地となる家庭の役割を見直し、家族の問題に父母が向き合うことが必要ではないかと考えられた。

4. 考察

5 事例を通して、子ども達は不登校を通じて家族構造の変革を促そうとしていることが考えられた。そしてほぼ共通して、父親イメージの再構築、世代間境界を明確にすることが求められているのではないかと考えた。

総合考察

家族イメージを捉えるものとして、KFD と FIT を用いたが、FIT はまだ分析指標が統一されていないなど発展途上のアセスメントである。しかし、FIT を用いることで、KFD では得られない基本的な家族構造についてより客観的に捉えることができた。また、家族に伝える客観的な一つのツールとしても利用できる考える。

今後大切なことは、家族イメージから適切な支援へと結び付けていくことであり、読みとられたメッセージについてフィードバックはもちろんのこと、子どもと家族を結びつける支援についてはさらなる考察が必要といえよう。